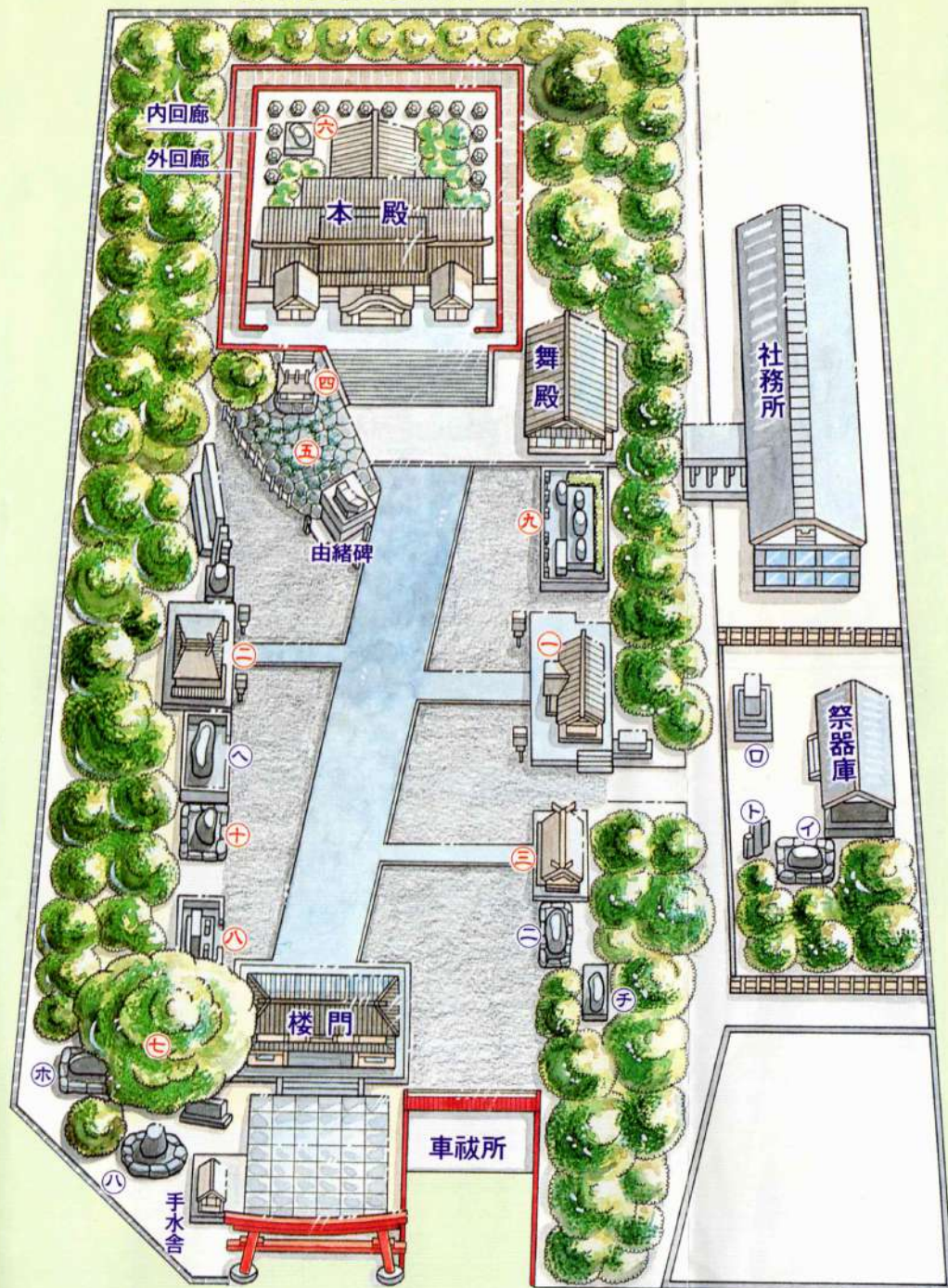




いよずひこのみこと
伊豫豆比古命神社略記
(椿神社)



◀伊豫豆比古命神社境内略図▶



伝説と地名縁故地

一、舟山

●伊豫豆比古命が此の地（津の脇）に御船を寄せ給いし時に、翁神（地主神・塩鳴柁綱翁神）が纜を巖頭に繋いでお迎えした。依って船山と名付く…という伝承があります。



●船山は現在の社地の丘を称する名前で、船岡、船山と言う地名は神社の社地が丘をなす場合広く使われたようで、丘の形状を小船の形で素朴に表現したものです。

二、鞘淵

●この鞘淵はサヤ＝サヤアカ＝清明の意味で清らかな水の湧出する泉の意味です。

●毎年元旦の午前二時、宮司がこの鞘淵へ湧き水を汲みに参りそれを御神前に奉る「若水汲みの神事」を執り行っています。奉られた若水は一年間腐敗することがありません。

●尚、当神社の氏子地域を石井、又鎮座地町名を「居相町」と申しますが、石井は砂礫の多い井（泉）、居相も又弥井



の意味ともいわれ、水に苦勞の多かったこの地方の極く少い泉を称えた名であるうといわれています。

三、潮鳴石

●本殿内庭神苑にこの石があります。この石を打ち、耳を当てると潮騒が聞えると言い伝えられています。数十年前にはこれにお米を供える人が有り、又この供米を歯の痛む時に噛むと痛みが止まると言われておりました。



●この付近には見付け難い花崗岩で古代祭祀の祭壇として使われたものではないかと考えられています。

四、石

（東参道の二の鳥居西手前にあるお旅所の南北に立っています。）

鷲舞・龍躍



●三輪田米山（神官・書家一八二一～一九〇八）揮筆の大字の中でも傑作の一つといわれています。米山は自主的独学心と猛習によって技法を完成し、優れた美感覚により造形と律動の自主性を発揮し天衣無縫の書を残しました。伝統を守り自己に徹し切った米山の書は本道を成就したものといわれています。

伊豫豆比古命神社社務所

〒七五〇・〇九四 愛媛県松山市居相町三三七
電話 〇八九一（九五六）一〇三二一
FAX 〇八九一（九五六）一三三二三

境内神社

名	跡	神名	御祭神	由	諸
④ 奏者社	潮鳴桺綱翁神	勝軍八幡神社	菅田別命	蒙古襲来の戦勝に因み、勝軍の名を冠す。	勝
③ 児守神社	天之水分命 木花開耶姫命 安産母乳の神。	御倉神社	宇迦之御霊神	居相の里の神。稲荷神社の御祭神たる神にして、稲の神。	勝
②					
①					

名跡

名	跡	神名	御祭神	由	諸
⑤ 舟山	〈伝説と地名縁故地〉に記述	古	楠	愛称を「お紅さん」と呼ばれる牝狸がこの古楠に住むという伝承あり。愛媛県に多い狸神話の一つ。	勝
⑥ 潮鳴石	〈伝説と地名縁故地〉に記述	古	楠	愛称を「お紅さん」と呼ばれる牝狸がこの古楠に住むという伝承あり。愛媛県に多い狸神話の一つ。	勝
⑦					

慰霊碑・和石

名	称	由	諸
⑧ 慰霊碑	石井地区の戦没者の慰霊碑 (石井地区戦没者慰霊碑建設実行委員会)	世界平和を祈念した和石 (修養団捧誠会教祖故出居清太郎氏建立)	毎年使用済みとなった大小種々の古筆をここに納める (県内の看板・塗装業者の組合が建立)
⑨ 和石			
⑩ 筆塚			

歌碑・句碑等

作者	作品
① 名譽宮司 長曾我部勝	おもえ ばおもわ れる 想 衣 婆 於 母 和 禮 留
② 同 右	恋闕(昭和天皇御在位六十年奉祝記念)
③ 正岡子規	賽銭のひびきに落る椿かな
④ 品川柳之	椿祭はたして神威雪となる
⑤ 河本南牛史	恵栄なもしお椿まいり道後の湯
⑥ 仲川たけし	鈴ひけば神とわたしに虹の橋
⑦ 小倉虹男	予の国に春立つ椿祭かな
⑧ 大野 静	むかし む可志 日本野久るに 陽加照りて 父野古恵るに もみす里の唄

伊豫豆比古命神社略記

(椿 神 社)

宮司 長曾我部 延昭

御鎮座二千数百余年、伊豫豆比古命神社は通称椿神社・椿さんとも呼ばれ、古くより開運縁起商売繁昌の神として世の崇敬厚き神社であります。特に旧暦の一月七・八・九日の三日間斎行される椿まつりは四国随一の大祭であり、愛媛県下はもとより全国から五十万人余りの善男善女が参詣に集う大変賑やかなお祭りです。

御祭神について

御	祭	神
愛	伊	伊
比	与	豫
売	主	豆
命	命	比
		古
		命

●伊豫豆比古命は湯の国の主宰神の意味を持ち、神格化された呼び名である。伊豫豆比売命はその妻神である。伊与主命は国造本紀(八一〇―八三九年編集)①に、応神天皇の御代初代久味国造に就任されたとある②。伊与主の名義は伊豫の主の意で、最古の道後温泉が勢力範囲に入っていたことから「湯の大人」からきているという説もある。古くから温泉として大和朝廷との交渉のあった温泉(ゆ)の国、また付近に展開する重信川流域を中心とした豊潤な地帯に住む先住者と一体化することは、時の中央政府にとつて緊要の政治的措置であったのである。愛比売命は古事記に伊予国謂「愛比売」とあり、見目麗しき女神の意と考えられ、本居宣長は古事記伝③に、愛媛の意を講説している。

●伊豫豆比古命と伊与主命の両神については、同神異名と考える説と、その祖神を神格化して伊豫豆比古命と称えその後継者を伊与主命と呼んだものとする説の二説があり定

伊予の名義

●伊予の二字は古事記に見えるのが初見で、国造本紀には「伊余」とあり、日本書紀、三代実録伊予風土記、湯国碑文には「夷与」とある。天平十年西琳寺僧宝帳には「伊預」と記す。

●イヨの字義について本居宣長は「弥」の儀と説き、郷土史家は「温泉」にイと言う接頭語が付いたと説いている。大方の研究者もイヨが湯に関係ありと認めている。「温泉」＝「癒」(病氣治療の効用から)でもある。

かではないが、久味に国造が置かれ国魂として伊豫豆比古命が主神として祀られ(先住者にとつて氏神でもあった)、その後継者であった伊与主命が久味国造としてその境域巡撫に当たつたとする説は、上代の記紀に見える先住異族との融和統一に見られる事例で珍しいものではない。

又、「播磨国風土記」にいう。胃岡(かぶと)というは、伊与都比古の神、宇智賀久牟豊富命と、相闘いし時、胃、此の岡に墮ちき。故、胃岡という。」と記載されているのは、伊豫豆比古命の神威が播磨の国まで届いていた証拠であると思われる。

①言久味国造輕島豊明朝神魂尊十三世孫伊与主命定二賜国造

②伊予の国造は成務天皇(一二二―一二九二)の朝に他国に先んじて置かれ、かつ、景行天皇熊襲征伐の折に大功を建てた敷術彦命の子速後上命が任ぜられた。国造本紀によれば、七世紀の始めの愛媛では、伊予・久味・小市(越智)・怒麻(野間)・風早の五ヶ所に国造があつたと記されている。久味国造は最初の国造、伊豫国造より僅かに数十年を隔てて応神朝に置かれ、初代国造に就任されたのが伊与主命である。

③愛比売は兄弟の女子を兄比売弟比売と云例多かれ、此国は女子の始の意にて兄比売か。又伊豫を元よりの大名にして見れば、彼大御歌(応神)の如く彌並宜島々の意にて愛は宜き意か。比売は比古に対して、女を美て云称にて、比は産巢日などの日の意なり。

つばきと椿祭について

いつの頃から椿神社・椿祭と呼称されるようになったか起源は詳かではありません。椿は我が国特有の花で、古代から日本人の生活とはつながりがあったようです。椿の花の咲き初める寒風の季節に祭祀が営まれその木の下で原始的な物々交換が行われ、附近一帯に多かった藪の中に交った藪椿の印象が神社の呼び名となり、椿は何か人間に新しい年の幸運をもたらす響を人々に与え、この簡潔で親しみ易い呼び名に定着したのでしょう。

つばきについて



●日本書紀によると、景行天皇の十二年、熊襲の首領土蜘蛛を討つため、豊後の国速水で椿の枝で椎を作って武器とし、その一族を平定したとの記事がある。その頃から椿は瑞祥破邪の木として長寿者や僧侶が杖に愛用し、朝廷の儀式にも使われた事が見えている。

万葉集には次のような椿を詠んだ歌が見られる。

巨勢山のつらつら椿つらつらに

見つつ思ばな巨勢の春野を

吾妹子を早見浜風大和なる

吾まつ椿吹かざるなゆめ

あしひきの八峰の椿つらつらに

見とも飽かめや植ゑてける君

●椿を美しい乙女にたとえたり、照り葉といわれる所以を巧みに表現したり、植樹をした事が窺われる。

●平安期には、悪魔除けのため、正月上の卯の日の宮中行事として、卯杖卯槌の代として欠く事のできぬ木であった。その他生活の具として貴重な油をもたらし、化粧の具として男女共に用いたという。思うに、その多方面にわたる効用は神秘的霊力を感じしめ、古代の人々は聖なる幸運をもたらす椿として、多くの願いを託してきたのではあるまいか。

また、その花木の強靱さゆえ貴ばれ長寿の代表とされたことは、盛唐の大詩人杜甫の「椿寿云々」の詩文とも心通うものがある。

●斎行日―旧暦の一月七・八・九日の三日間

●「立春に近い上弦の初期」と月齢を定められた初祭であり、「椿まつり」「お椿さん」又は「伊予路に春を呼ぶ祭り」の愛称で親しまれ、愛媛県下はもとより、北は北海道南は九州までの広く厚い人々の信仰に支えられた祭です。この春祭は今や松山地方随一の大祭になりましたが、全国から五十万人余りの善男善女が参詣するこの祭りは、松山地方だけでなく三日間の参拝者数から言えば四国随一の大祭であり、年々増加の傾向にあります。

●又国道三十三号線からの東参道の両側にはびっしりと露店が立ち並び、その数は全国有数であります。

●椿祭神事表

椿 祭 日 程 表							
旧 曆 一 月							
九 日		八 日		七 日		日	時
午後十二時		午後八時 午後六時半		午前零時			
閉 門		還御祭 御旅所祭 大御祭		開 門		祭典	
							特殊神事
合せ火 お忍びの渡御							
貸 銭 神 事							特別祈願
その他	年賀厄除	学業成就	海上安全	大漁満足	交通安全	家内安全	
						商工繁栄	
						豊饒祈願	

●特殊神事

一 貸銭神事 (椿祭の三日間)

小額(二十円)の守り金を借り、翌年倍額(多いとの意)にしてお返しする行事です。借りる際に神社側より氏名・住所を尋ねられる事は無く、誰もが無条件に借りる事が出来る神と人との信仰と信頼に基づいた特殊神事であり、本年も生活に励み、来年無事にお返し

椿祭について

賽銭のひびきに

落る椿かな

正岡 子規

椿糸はたして

神威雪となる

品川 柳之

恵榮なもし

お椿まいり道後の湯

河本南牛史



椿まつりの賑わい



お忍びの渡御

の参拝が出来る事を祈る神事です。
江戸期に行われた散銭の行事が変型したものでしょうが、次に記すお忍びの渡御・合せ火と共に全国に類を見ない特殊な宗教行事と言えます。

	借り	返し
1年目	20円	—
2年目	20円	40円
3年目	20円	80円
4年目	20円	160円
⋮	⋮	⋮
10年目	20円	10,240円
11年目	20円	40円
12年目	20円	80円
⋮	繰り返し	⋮

二 お忍びの渡御 (椿祭中日午後六時半)

椿まつりの期間中でも最も参詣者が多く境内が大変な賑わいと混雑をみせる中日の夜半、御祭神を神輿にお遷しし金刀比羅神社（北土居町）のお旅所まで御神幸願うお祭りなのですが、神輿が御殿より内参道・楼門へと至る間に限り、昇き夫は一切掛声を発せず黙し又上下左右に神輿を昇き揺することもなく、ただただ静々と昇き出して行くのです。その静粛とした御出籠の様子が、神様が秘やかに御出されるが如くに映るので「お忍びの渡御」と称するようになったのです。

●全面金箔に飾られた神輿が、奥丁の翳す提灯の明りに照らし出されながら静々と御出御される様は、厳粛にして幻想的でさえあり、境内を埋め尽した参詣者は自然と黙して神輿をお見送りするのです。
●しかし、何故にお忍びで渡御されるのかについては諸説・俗説多々あり、何れも定かではありません。

三 合せ火 (五馳走火とも云う)

●右記の渡御の際、そのお道筋に当る家々では、その年の正月に飾った輪じめ等を家門にて焚き篝火とし、神輿をお迎えするという風習があり、これを合せ火と称します。